

終小眼を休むる夜梶束を握て油ひせば東方の横雲駁き高
 麗國の高山も不のうみ見(波)上下力を得て城一万里を隔る
 敵國のり(と)と(と)故國の着る心地と程(と)四百里刻西生海小乘入
 ける飛彈さ(と)本陣(と)奉行集り封を用き洋見を秀詮公は覽
 の為見和泉も釜山海(と)持参せり角て(と)中浦人(と)仲(と)意軍
 る出(と)褒美(と)て白銀三十五枚主計(と)左(と)東(と)大夫(と)と(と)十枚(と)仍
 中浦人怨悦の眉を(と)用(と)ら(と)ふ

秀詮公朝鮮九ツの付城小城主を仰付ら(と)東の先(と)慶尚道
 蔚山の城加藤主計頭同國西生海の城毛利壹岐(と)同國釜山海
 城寺澤志摩(と)同國竹島の城鍋島信濃(と)同國リヤク山の城小

寺甲斐(と)後(と)長(と)改(と)同國コチヤウの城立花左近大夫(と)後(と)飛(と)彈(と)侍(と)從(と)宗(と)茂(と)忠(と)清(と)道(と)河(と)川(と)乃

城島津兵庫隊同國南海の城宗對馬(と)西の先(と)同國順天の城小西
 振津(と)と(と)定(と)ら(と)其(と)外(と)武(と)十(と)餘(と)人(と)の(と)大(と)小(と)名(と)六(と)万(と)二(と)千(と)餘(と)人(と)の(と)人(と)數(と)を(と)以(と)て(と)上(と)意
 の如く蔚山城(と)を(と)付(と)せ(と)一(と)普(と)清(と)急(と)ぎ(と)由(と)於(と)原(と)下(と)野(と)吉(と)山(と)口(と)玄(と)蕃(と)先(と)と(と)以(と)て
 仰付(と)せ(と)り(と)二月(と)六(と)日(と)より(と)五(と)掛(と)赤(と)詮(と)公(と)加(と)藤(と)左(と)馬(と)介(と)を(と)召(と)て(と)其(と)方(と)此
 度(と)加(と)判(と)せ(と)る(と)事(と)比(と)類(と)な(と)き(と)思(と)言(と)依(と)て(と)人(と)の(と)奉(と)行(と)同(と)蔚(と)山(と)普(と)清(と)の(と)奉
 行(と)仰(と)付(と)左(と)馬(と)介(と)感(と)涙(と)と(と)流(と)し(と)手(と)紙(と)を(と)赦(と)免(と)る(と)事(と)を(と)仰(と)付(と)し
 ら(と)事(と)誠(と)小(と)方(と)難(と)き(と)次(と)弟(と)と(と)申(と)上(と)御(と)前(と)と(と)退(と)り(と)至(と)

三月十三日小意(と)普(と)清(と)急(と)ぎ(と)由(と)於(と)原(と)下(と)野(と)吉(と)山(と)口(と)玄(と)蕃(と)先(と)と(と)以(と)て(と)上(と)意
 言(と)上(と)ら(と)る(と)事(と)は(と)稅(と)者(と)小(と)思(と)言(と)と(と)あ(と)ら(と)七(と)日(と)小(と)法(と)師(と)朝(と)の(と)山(と)出(と)船(と)と(と)り(と)言

佐出さる故に諸大将の供の用意一旗指物とて舟を飾り左るが
 敵小向ぶやく弓鎗長刀と押立十六日小旗らまら城下釜山浦表の
 海上小乗這ぐる十七日の未明秀詮公の日本丸の大船五切籠小火と立
 て推出さ諸將悉く押はる奉り出船は四月四日秀詮公大坂小治
 著船山屋形ふせ給ふ諸大将も残りぬ供して著岸次は使番の
 士と名て早く伏見より町中小山家流士の宿札を打し一明五日あむ必
 涉上洛とは信付五日早天大坂と出陣は先手杉原下野も二備山口
 玄蕃元旗手鉄炮鎗家の如く先手は先陣其間二百餘と
 隔るは旗先足輕三百旗奉行中瀬帯刀涉本陣の山先手坂崎出
 雲の鷹匠の面指加りは旗本小は使番は近習の士供奉し山跡

備の大将松野主馬首行儀一々諸道具を括り静くと伏見一を
 伶一都鄙遠境の旅人等ふままで幾千万の限りあく居並びて見
 扱も七人の山をの初て湯朝の大小名皆く供奉しよりけ系
 大將軍公涉登城小依る内大臣家康公福島左衛門大夫正則卿加賀
 大納言利家卿同嫡子肥前青木紀伊守京極少将伊達信光會
 津中納言山形出羽も長岡越中守 後細川三斎 結城中納言秀康卿を
 始として近習外松の大小名残りぬ同公の新小大相國公出陣大
 將軍一涉對顔山河を掛らも七人の奉り左馬介苦勞伴りしこと
 上意あり太田忠輝も蔚山の城上意を以て直ししは僧團も
 一上覧小奉りけし三國並の城ゆるらんと涉機埜流しては

定ありたる八軍小勝て功を後世に示し古今の通例を如く況是を
 秀吉治世の間小朝鮮の征伐せる希代の事あれは和漢両朝末代
 の名譽不可備と仰て日本の軍勢十六万騎が討つる朝鮮人の首
 級十八万五千七百三十八大明人の首級二万九千十四都て二十一万四千
 七百五十二平安城の東る大佛殿造ふ土中築籠石塔を立て貴
 賤今も其を軍中の為終忠功の者の働ふと委細日記小書付て
 諸寺諸社小奉納し給ふきふんと沙汰し敢てんり公沙快きか
 る儀事と大田飛驒も謹て言上仕る今及秀詮公多頼る居下
 知の心彩ふより龍兵の運命も助り諸軍勢大不利を傳る事山若
 年と八申されむ古今無双の尊將を思ふは聖勇ふ少くも遠

せ給ふづぐと申上る殿下上聞かて藤原石田三成が讒言一奉
 り一故上意をなぐる大將軍の自ら矢を取と云事ふ一此及秀
 詮と名代と一憑て深淵小隙と薄氷を履とやらんは後悔と思ふ
 るりと有らまは上意の下より秀詮公宣ひけるは飛驒も左馬介能
 承と除の常の所名代と有は海沿の所存もなごもとも軍陣
 のは名代ある故若輩よりと一とも清申渡海あり我々今
 後悔の上意出仕の者共数人の耳目も死しく生界の者より予不
 覚かりたて奉行の者共願ふ言上致し秀詮公首を刻らと後悔
 悔の着りれは松小飛驒もたる介申上ると候返しは高き萬
 死の内氣色と見ても沙汰小憐もかく頻に宣ひ公沙ををを

たまひ沙家老の杉原下野は山口玄蕃元小苦勞仕りしこと同
 を掛くは簾中へ入らせ給ひけふ如小家康公秀詮は傍近く寄
 給ひ相涼くもなれりとの哉尤も極まり清父子縁の由中何の
 由子細なきと極く練給へ殿中何公の諸大名一同小参あり
 中石田治部少輔下野も玄蕃元小近付て云々のみ今昔は返
 参ふ依て公清機嫌あり見一を治先は屋形は供ありき私
 語る秀詮公風小用名て只一封よと思言辨中は腰物とお門より
 立せ給へるに家康公のきとありも治部少輔推参も申罷立
 魚一と多給へる相家康公秀詮の由子と引き清出城は屋形
 小までは供ふはし私と給へる小大相國公上使としてカウグウスと

云々申上り上意の趣申はきり給へ此は高麗の由切き時と申思
 りし小只今の由切強と申上はるは科意とて越前國は國替と給
 せされ由申上はるは秀詮公大まは腹立有ては丘尾の畑付る
 事と給へと教へ念給へカウグウス迷惑一上使の身も海に上意
 の趣を申上るも私事と給へひまらふきと有られは秀詮公由科
 急請しきは各を覚へて只頭を刻らる一命有へ限は國替は仕ま
 き由申上ると持仰へる家康公カウグウスを引退給て秀詮公は悦
 小思は由清前然る給へ仰よのきと宣ふカウグウスは尤も
 そは給へる異見迄人進せは沙取持の次第政所のは基極は要く
 申上りしと歸まりの角は内府色と申異見一先誠ありは國と

宣公共秀詮公多ては、
 給ふも秀詮公は、
 思ふ念せ給ふは、
 りととも余り、
 忠治部少輔めと見令次第討切其後分別せしむべきに放され
 有るよは、
 内後者て、
 心腹いせの、
 一、
 きよ依て、

家康此程ハ殊の外奉公勤り奉りたりと宣ふ其言兼て種として
 家康言上ハ曰秀詮公朝鮮正への功は、
 出され仰願へは、
 嫌と恐て申上得せと宣ひよと其より、
 けまハ公は、
 公正事と、
 ひご子の宣ひ、
 次第と、
 宣ふ難有上意と、
 入給ひ、

國筑下(下)と宣(下)の相秀詮(下)供(下)して六月二日は登壇(下)たふ
公(下)對面(下)機嫌(下)能(下)て秀詮(下)朝鮮(下)苦勞(下)の(下)後(下)美(下)と仰(下)せてタカキ
貞宗(下)の(下)涉(下)太(下)の(下)吉(下)光(下)の(下)行(下)打(下)大(下)般(下)若(下)捨(下)子(下)の(下)壺(下)ニ(下)涉(下)茶(下)道(下)具(下)鷹(下)武
足(下)山(下)馬(下)二(下)之(下)黃(下)金(下)千(下)枚(下)進(下)せ(下)と(下)家(下)康(下)公(下)光(下)思(下)の(下)腰(下)物(下)判(下)金(下)三(下)百(下)枚(下)下(下)置(下)れ
涉(下)務(下)拜(下)極(下)の(下)馳(下)走(下)中(下)を(下)將(下)合(下)形(下)ゆ(下)せ(下)給(下)ふ(下)秀(下)詮(下)公(下)使(下)番(下)長(下)涉(下)務
豆(下)ち(下)と(下)て(下)家(下)康(下)公(下)を(下)さ(下)る(下)は(下)何(下)も(下)田(下)今(下)夜(下)の(下)持(下)を(下)本(下)國(下)ゆ(下)は
其(下)上(下)色(下)は(下)懇(下)め(下)時(下)合(下)を(下)終(下)申(下)下(下)と(下)を(下)依(下)つ(下)ら(下)れ(下)る

七月上旬の比より大相國公何と云は遠例と風國を祿(下)目(下)度(下)代
の(下)威(下)風(下)廣(下)大(下)遠(下)み(下)て(下)四(下)海(下)波(下)靜(下)ふ(下)初(下)り(下)揚(下)柳(下)の(下)風(下)枝(下)を(下)な(下)す(下)は(下)和(下)花
乃(下)雨(下)塚(下)を(下)破(下)ら(下)る(下)と(下)や(下)ら(下)ん(下)春(下)の(下)吉(下)野(下)醒(下)翻(下)の(下)花(下)見(下)夏(下)の(下)四(下)月(下)の(下)殿(下)中(下)に

明(下)一(下)暮(下)一(下)夕(下)ひ(下)宇(下)治(下)川(下)の(下)竹(下)秋(下)を(下)美(下)濃(下)尾(下)張(下)三(下)河(下)遠(下)江(下)の(下)鷹(下)野(下)遊
ば(下)れ(下)世(下)お(下)ち(下)人(下)お(下)ら(下)は(下)知(下)れ(下)と(下)わ(下)け(下)も(下)出(下)家(下)後(下)家(下)人(下)の(下)や(下)び(下)の(下)小(下)金
銀(下)米(下)錢(下)と(下)り(下)れ(下)路(下)頭(下)山(下)林(下)賤(下)公(下)下(下)ま(下)て(下)も(下)家(下)屋(下)下(下)ま(下)て(下)も(下)普(下)同(下)並
悲(下)の(下)涉(下)惠(下)四(下)方(下)満(下)加(下)り(下)て(下)日(下)本(下)國(下)中(下)悉(下)く(下)捨(下)地(下)付(下)ら(下)ま(下)石(下)積(下)り(下)小
極(下)り(下)如(下)何(下)成(下)出(下)家(下)沙(下)門(下)海(下)士(下)は(下)丘(下)尾(下)お(下)ま(下)ん(下)安(下)く(下)所(下)務(下)と(下)ふ(下)一(下)年(下)一(下)歳(下)も(下)そ
願(下)を(下)成(下)し(下)涉(下)不(下)例(下)と(下)聞(下)て(下)天(下)下(下)の(下)笑(下)止(下)是(下)より(下)と(下)上(下)下(下)悲(下)お(下)ふ(下)と(下)云
その(下)お(下)一(下)去(下)程(下)八(下)月(下)上(下)旬(下)夫(下)の(下)法(下)遺(下)命(下)あ(下)り(下)て(下)は(下)形(下)見(下)の(下)名(下)と(下)と
諸(下)大(下)名(下)下(下)さ(下)る(下)角(下)て(下)十(下)五(下)日(下)の(下)朝(下)カ(下)ラ(下)ツ(下)ス(下)と(下)ら(下)て(下)は(下)硯(下)料(下)紙(下)を(下)乞(下)給
ひ(下)清(下)筆(下)と(下)添(下)給(下)ふ

一よん(下)枝(下)さ(下)る(下)と(下)き(下)事(下) 一お(下)ん(下)さ(下)る(下)と(下)き(下)事(下)の(下)り

- 一 大なる御所の御
- 一 一人の御所の御
- 一 二の御所の御
- 一 内の御所の御
- 一 おたの御所の御
- 一 何の御所

雲の世よはゆきまらぬ一我多の

たぐふことすゆきまらぬゆき

とぞおぼけけるまはは個日を遊見たのまらみかく見しを給く天下の
 名譽教とあて集りつ岐伯黄帝の秘旨を業一河間丹溪の妙方

たゞしそやう一たゞしそやうの更なる御所もまらまらだ社の奉幣寺の懸
 祈月待日待星祭泰山府君までおみり色とよはは定業あまは甲斐もか
 一淀松の御臺祈申おなご殿中上下の女房達御力を失ひまら
 あん角お流しを給かんと案下頼お折前中の丸の御主殿本村宗
 柱かまらり一戸柱敷居鴨居等折入の天上までも金のうら具の高
 時繪より御障子のはるる狩野長谷川うきをきりてさし障子
 の人給二万も三万も敷とをきりお思はらたをば見え血の流り
 里不思議とおめい妻一見えは幾千万も巻く眼の際より類先
 まご流かめい濃みまき血の涙二回お付く有なき諸人足を見て
 氣も涙も失果て流りまはらひ流らむせむけの十七日の辰の刻

公大野修理大夫早見甲斐守片桐兼市正を所座の所主殿に召され
 法印とすはと秀頼をもちまはし由上意あり又法廟の東山の麓に
 構一正一位豊國大明神と願一奉る金き肯仰らるる三人あり
 悲涙と袖小濡し清おと露立ちふら然るに此君天文五年申八
 月十八日辰の刻に誕生あり一に慶長三年戊辰落月十八日辰の刻
 涉年六十三歳少くも極の夢を醒る大名高家の恩澤小浴せし
 その公少及び天下の貴賤男女をさまじくも考妃を要するあり
 猶致りりる唐堯殂落しむひ田海の青をよと名其上吉の聖
 帝号を末世の名將時隔り世異りといふも符符符を合さるる
 如るり有終りり一名将あり今の際の以解相傳ふ人少きと云

り江蕙蘭を焔易く良玉に堅くは浮世に只愛の如く悦ましく
 くぞやと今更思ひまじり涉まゆあり一石田治郎少輔三成
 浪野彈正少弼長政増田右衛尉長盛長東大藏大輔正家并片桐
 東市正同主膳正大野修理大夫相談しは他界を暫く隠密に
 まらんと欲しては死體と金具時繪の法箱を納め奉りたる然と
 いどもは他界世小隱ふきよ依て收長月の上旬都の末小當り
 阿弥陀が峰小沙箱を納まりけり
 秀元金吾黄門秀詮公少仕奉る一は政所極法使として
 参り一時ゆくとほ返すを待たる回よカラソウスふ合回方
 山の物語の序小秀元きたる大徳高家の身の上よ人よ

上りの路みちへまき車くるまもとりて大君おほきみ伊世いよの時とき
奇異きいなるは事こともははるもと尋もとりまはカウヅウス答こたへて除あはり
ふらりあるは指さし緯いはふぶが折あの壺ひらの比ひまどろまを給たまふ
ては目め見み平ひらを記しる奉ほうぶくば又また人も来るくる給たまふと
く只ただ一人ひとりは座ざをいせ内うちよりうきをうけひて乃すなは
ま勢せいあふ小こ陰かげも久ひさしく目め覚さる柄がらの基もと計はかりを持もちて行い
て障さやう子こふ少すこき穴あなをあけず潜ひそみ見みまはる十じゅうを成なり成なり二にを
は座ざをいはい小こ大おほきく成なりらせ給たまふ津つ姿すがた成なり成なり又また乃すなは
乃すなは時ときもはる大おほきく成なりらせ給たまふ津つ姿すがた成なり成なり又また乃すなは
乃すなは毛けもはる計はかりりら給たまふ津つ姿すがた成なり成なり又また乃すなは

洛らくのまけふ

十月一日じゅうがついちにちの末明すえあきより浄廟じやうでうの地形ちけいとあり石垣いしがきをはき本社ほんしや宮殿みやうでん四
廊らう陣じん殿でん三門さんもん等らう馬ま屋やふとまを造ぞう造ぞう宮みやうをいとまきらる程ほどり並なら
木の橋きしのはし石いし燈籠とうろう以下いげまも悉しつく慶長けいぢやう四年しよんねん己つひ亥つひ三さん月げつ中ちゆう旬じゆんふ出来き
ま四月十八日しよがつじゅうはちにち浄宮じやうみやう移うつりたる斯ごとりけり如ごとく洛中らくちゆう洛外らくがいの町まち人ひと商しやう人にん
寄合よしかいで浄代じやうだいの鏡かがみの明あきる級ぐいふ心こころを任まかせ豊とよ永えい年月ねんげつ洛世らくせを送おくる
云い々い偏へんふは重恩じゆうおんふ非あはやせえと躍おどろとあが上うへ遷宮せんみやうとまをいしめ
まをいしめと一いつ同どうして金銀きんぎんをいていて流ながいと流ながる人ひと足袋たび脚絆きゃくばん腰こし
みの小こ金きん紗しや羅ら金きん羅ら紗しや猩せう々い緋ひ金きん欄らん綾あや錦きん襦じゆ子こ無む綾あやと立たていて紅べに
線せん草くさ鞋せを履はく面めんはき足あし花はな桶ぶく花はな菴あま龍りゆう辰しん象しやう虎こ麒麟きりん唐たう獅し

月つき年ねんの書しよ

子孔雀鳳凰或大小の禽獸大魚皆けらふまて松の作物道より
らに寶前より躍る拍子小吉野梅の散る如し十二頭の駿小八白
後白羽二重と心て十二幅の折掛十六幅の白母衣十二幅の衣或
ハ金襴緋純子小大旗を立一子小押立貝鐘太鼓白鼓洛中と
ひかりと系大明神の宮中沙門外云々及び洛中ハ皆金銀の
砂を委ふりき異國の事ハと云々日本に於て用關より以
來振少き事よりけり

右此書を見る人ハ始終只大河内氏軍功と譽ふ如く日暮
のまに其意と云くより一言とま付ゆるまに云と云々
然とも其隠と云くと探る小凡さるもの自媒して婦女

の行をあらわめくや禹をたの孟殿と稱する事と希一上六
殿下の威武と頭一将卒の忠義と奉下あ々後裔と厲さ
さんと云々云々然も此書の中ハ大道妙用あり正謀あり
奇計あり宣士あるもの明鏡後戒あるもの夏と清んや
文辭小三史春秋奇筆あり和歌小源氏三代の佳作ありそ
の徳實と拾ひつひくんと文辭の感るごとくと笑へ謀業と
摘むの言句の奇ある事と清らん後覽の君子其
辞句の賤きと志氣らとこのまに其場々の見記小随
て是を校一其を正一従ひ敵の末の業ありとも何んを有
る事と一其意と云くや此に於て日本國中大小の神祇